イエスは主なり

日本クリスチャン・アシュラム連盟

日本アシュラム

アシュラムとはスタンレー・ジョーンズ師がインドの退修方式を取り入れて創設されたキリスト教の新しい祈祷運動である。

開心・静聴・充満・献身・奉仕　149号

心の底からの新しさ

エフェソ4の22～23

横山　義孝

アシュラムとは、信仰と聖霊によって、魂の王座に主ご自身をお迎えし、霊魂の全き更新の恵みを頂く祈りの運動です。エフェソ4章22～23節には、「滅びに向かっている古い人を脱ぎ捨て、心の底から新たにされて」とあります。ご自身の像に似せて人間を創造された、聖なる神のみ旨は、人間が神ご自身の霊を自らの魂の座にお迎えし、その霊なる神ご自身のご支配に自らを明け渡した歩みをすることによって、はじめて平安と喜び、命と希望の人生を歩むように意図されたのです。

ところが人間は不従順、不信仰の罪に陥り、肉欲と高慢の自我を、自らの魂の座に据えてしまい、神への不信、不従順の罪を犯し続けて、自らを悪と悲惨との中に陥れてしまったのです。大凡の人間、この自己矛盾と悪の奴隷状態から解放され、新たにされたいと願わない人間はいないでしょう。しかしこれは、肉体を鞭打っても、精神を鍛錬しても、所詮出来るものではありません。方法は唯一つです。「古い人」（不信仰な自己中心の生き方）を脱ぎ捨て、心の霊を新しくされる（霊なる主キリストご自身を魂の王座にお迎えする）ことによってのみ可能とされるのです。いわば魂のぬし交代という構造的な新しさによるのです。

我らの先達S・ジョーンズ師は、20世紀の初頭、インド同胞への宣教の召を受け、23歳で勇躍その緒につき、全身全霊を注いで伝道救霊活動に専念したのでした。自らの体力、知力、精神力をもって、インド同胞を神の国に迎え入れることが出来ると信じて全力投球を献げたのでしたが、結果は彼自身の崩壊の危機に直面してしまったのです。「8年間の緊張は神経の消耗と脳の衰弱をもたらし、万策尽きてわたしの精神は粉砕されてしまった」（インド途上のキリスト）と記しています。ラクナウの集会で祈祷中、彼は「その重荷をわたしにまかせるか、わたしが処理してあげよう」とのみ声を聞いて、自分の知恵や力でだけ解決しようとしていた自己自身を主におゆだねした時、平安と喜びの充満に預かり、それ以来70年にわたる勝利のインド伝道が始まったのでした。「あなたの重荷を主にゆだねよ、主はあなたを支えてくださる」（詩55の23）。

（日本基督教団東京教会牧師）

霊想

「死にたくない」に応える神

日本ホーリネス辻堂教会
伊藤　節

あなたは普段「自分は死ぬものである」事を考えているでしょうか。昨日も今日もそして明日もほぼ同じ生活を繰り返している中で私たちはその事を忘れてしまっているのではないかと思うのです。そして「自分は死にたくない」と思う心こそ万人が願い求める本音ではないかと思うのです。

何かを機会に死について思い巡らせてみれば人は誰でも死んでこの世を去る事が分かります。自分とて例外ではありません。にも関わらず「自分は死にたくない」との思いも打ち消す事が出来ない事実です。

自分の先々の事を思い描いてみてください。そこに描き出される自分の将来は、例えば社会的重責を担う社長、健康で世界を旅する富豪家、市民の喝采を浴びる名誉市民、或いは中流の幸福な家庭、仕事は順調、子育ても喜びとか、或いは貧しくとも愛に満ちた夫婦とか、または健康に悩むベッド生活とか、孤独の寂しさの中で日だまりに座る齢多き身とか、色々な自分の将来像を描いてみて下さい。しかしどれを取ってもそこには自分の生きている姿こそあれ死んでいる自分は描かれていないと思います。私たちはこの死を考えない世界に何時も生きているわけです。

扨、前掲の御言ですがイエス様は仰せられました。「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。」と。

①だれでもわたしについてきたいと思う人とは

わたしとは神の御子イエス様です。すなわち神です。そして神は人を愛し、イエス様を信ずる人に永遠の生命を与えられます。この永遠の生命こそ「自分は死にたくない」という万人の心に秘める根源的欲求に真正面から応えるものです。ですからこの①の言は永遠の生命を与える神について行きたいと思う人、即ち「だれでも『自分は死にたくない』と思う人は」と言い換える事が出来ます。

②自分を捨て（なさい）とは

自分の思い、その思いに従って行為される言動や行動、その全てを捨てる事です。先程描いた自分の将来像を思い出して下さい。それらは全て「死の部分の皆無」の人生設計になっていませんか。私たちの生きている地上の現実には歴然として死ぬという事実が存在しています。にも拘らずその死ぬ事実を切り捨てた人生を歩もうと、否既に私たちは「死の無い人生」を歩んでいるのです。死を考えない人生は現実に立脚していない虚像であり陽炎や蜃気楼の様なものです。この虚像を実像と錯覚して全エネルギーを、全ての能力を、全ての時間を虚像に費やしている、その自分を捨てなさいと言われるのです。

③自分の十字架を負うて（きなさい）とは

自分が磔刑の宣告を受け、今、自分が刑場に向かって自分の十字架を背負わされて歩いている姿です。イエス様がゴルゴダの丘に向かって歩む姿そのものです。この自分の十字架を負う姿こそ、この世を生きる自分の真の生涯であるという事です。この現実、この事実を直視せよ。これこそ実像。この実像に立脚して人生を考えなさい、と言われるのです。この現実に納得する時この世の栄華は虚像でありこの世に在っては絶望しかない事を思い知らされます。心の本音は「自分は死にたくない」のに「じぶんは死ぬ」のです。この矛盾を悟ると、「永遠の生命」を真剣に求め、そこに至る道を一心不乱に歩み出します。如何なる障害や嫌がらせにも如何なる艱難にもめげる事なくただこの道のみを歩き続けるのです。

それは道徳的に善い事とか倫理的に適うとか、そんなもんじゃない。ただ自分の本音、真実な求め「自分は死にたくない」に応えてくれる道はこれしか無いと確信するからです。

④わたしに従って来なさいとは

イエス様（神）に従いなさいというのです。「従う」には相手を主と仰ぎ、信頼出来なければそれは出来ない事です。しかしそんな理屈を捏ねて従えと言っていないのです。イエス様は十字架の磔殺と甦りと言う歴史上の事実を以て永遠の生命に至る道を詳らかに示し、イエス様に従う道こそ、それであると仰られたのです。そしてイエス様を信じる信仰に依って、イエス様に倣って「この世に死に切りなさい」。イエス様同様に十字架を負うて行き着く処、即ち「十字架の死に至る迄忠実にイエス様に従いなさい。」と仰られるのです。

わたしがイエス様を離れられないのは道徳や倫理の高尚な教えやイエス様の崇高さよりも自分の根源的欲望「死にたくない」にどこまでも寄り添って全くの罪を赦して下さるイエス様に魅了されたからかも知れません。寡婦に勝利の判決を下した神を神とも思わぬ裁判官の譬えを思います。

完

立　証

横浜岡村アシュラムの恵み

早園　貞子（横浜岡村教会員）

私は六月始め頃から口内炎が出来、七月初めには食事も思うように出来なく、体力が落ちていくのを感じていました。そのような状態で連鎖祈祷を致しましたが、聖書通読の中で「キリスト・イエスの立派な兵士として、わたしと共に苦しみを忍びなさい」（Ⅱテモテ二：三）が心に残りました。

今回のアシュラムで「私は祈りの細胞の座長の奉仕をさせて頂くことになつて居りましたので、五日、六日は静かに家で過ごし、「神様どうぞ力を与えて下さい、ご奉仕が出来ます様に」と祈りました。しかし七日の朝は、最も体調が悪く、起き上がれない状態になってしまいました。十一時頃まで静かに、床の中で過ごし起き上がりましたが、口内炎がひどく、話をするのも辛い状態になって居りました。ともかく先生に祈って頂こうと、午後早めに教会に行き、先ず祈って頂きました。

開会礼拝が始まった頃には、身体に力がついて来た事に気付きました。祈りの細胞の時は、皆様に口内炎のことを伝え、少々聞きにくい処もあつたと思いましたが、私としてはそれ程辛くなく、話す事が出来感謝でした。

八日の朝、右肩の刺すような痛みで目が覚めました。食事も牛乳を飲む程度でしたが、昨日も守られたゆえ、恐れず八時頃教会へ行きました。二度目の祈りの細胞の時も、口内炎の痛みも肩の痛みも、耐えられない程でなく、ご奉仕が出来ました。

最後の充満の時、私は身体中に喜びが満ちて来るのを感じました。すべての行程に参加出来、ご奉仕出来たのは、「主」が力を下さったからと、感謝の思いが一杯になり、喜びを皆様に話さずに居られなくなって話しました。

今迄で一番つらい時を過ごしたアシュラムでした。「主は人の一歩一歩を定め、御旨にかなう道を備えてくださる。人は倒れても、打ち捨てられるのではない。主がその手をとらえて下さる。」詩編三七：二三～二四

このみことばが、祈りの内で与えられ、励まされ信じることが出来ました。このみことばが現実となつて、体験させて頂いた、すばらしいめぐみのアシュラムでした。感謝！

立　証

第26回横浜岡村アシュラム報告

安藤　脩（横浜岡村教会牧師）

岡村アシュラムは、多くの方の祈りとご協力によって、第二十六回を開催できました。今年は賜東アシェラム委員の川村秀夫兄（新宿西教会員）をゲストとして迎え七月七日（土）八日（日）に行いました。川村兄は教会のゲストルームに宿泊し、全プログラムに参加くださいました。

主題は「主イエス・キリストの弟子となる」（マタイ福音書二八章一八～二十節）で助言者は安藤がいたしました。

準備の連鎖祈祷は、主題と関連をもたせて、テモテの成長を願ってパウロが書き送ったテモテへの手紙第一と第二」を二週間読みつつ、各自がデイポーションの時をもち、備えました。

開会・開心の時から参加できたのは二十二名でしたが、続いての祈りの細胞は三グループに分け、ちょうど良い人数で、ニードを分かち、祈り合いました。夜は、スタンレー・ジョーンズ師のアシェラムでの助言者としての姿を映した「神の魚り人」と日本アシュラム連盟五十周年記念の歩みを示したDVDを見、アシュラムは何かを皆で再認識致しました。

八日は、午前八時から静聴をいたしました。この日は教会学校も縦割りで祈りの細胞や子どもたちにとって、お友達のために執り成しの祈りをすることは、初めての経験の子もおり、少々、緊張気味でもありました。福音の時は主題に沿って「自分が救われただけで満足するのではなく、弟子となる」ことの大事さが説かれました。又、ゲストの川村兄は、お嬢様が統一原理に入会したことにより、救出活動を通して体験した奇跡を語られました。神様は川村兄のこの苦しみの体験の中に、救いの計画を立てており、不思議をなす主の聖名を崇めました。

後の反省会で、若者の参加が少なかった。このことはアシュラムに関する啓蒙と、早くから参加を促す必要がある。労作の時間が長くなったため、高齢者が少々疲れてしまった。との反省がありましたが、今年の岡村アシュラムも恵み豊かなものとなりました。感謝！

御国を来らせ給え

神の国についての概観

D・P・タイタス（インド）

序言

私が最初に神の国の教義に出会ったのは、Eスタンレー・ジョーンズ博士による教えによってであった。私にとって、それは深遠な発見であった。私は既にずうっと以前一九三八年にキリストへの信仰による改心の経験をしていたのであるが、私の信仰は未だその十分な理論的基礎を見出していなかった。それ故神の国の教義は私のその後の見解と牧会に大きな相違をもたらした。私の信じるキリストは絶対確実な神の国の王以外の何者でもなかったことを理解するようになった。

過去二世代の間、教会では信仰のリバイバルの主唱者の一人であった。しかし私は神の国の真理についての充分な理解なくしては、教会としても個人としても多くのリバイバルも長続きしないことを知るようになった。

それ故われわれにとっては、イエスと彼の弟子達が、他のどんなことよりも多く説教した主題、即ち神の国にまで帰ってくることが最も緊要なことである。多忙な牧師達やクリスチャンの働き手達は、その多くの説教や聖書研究を本書の大まかな概観の助けによって、有効に展開することができると信じる。神の国の言葉は求道者や若い回心者達のみならず、全ての信徒達のためにも強力な信仰の糧となることを立証するだろう。

1 神の国の使信の重要性

聖書はいろいろの国があった（歴代下一の一）。悪魔と獣の国がある（黙一六・一〇、マタイ一二・二六）また神の国（或は天国）もある。それと共に神とキリストの国とが提携している（エフェソ五・五）。神の愛する御子の国（コロサイ一・一三）。イエスの御国（黙一・九）。人の子の御国（マタイ一六・二八）。父の国（マタイ二六・二九）。

神の国に関する簡単な摘要を次に示すことにしよう。われわれの主イエス・キリストの使信の全体は神の国に関係をもっていた。それを見ることにしよう。

全ての福音は御国の福音とよばれている。（マタイ二四・一四）言は御国の言とよばれている。（マタイ一三・一九）中心的な使信は神の国である。（ルカ四・四三）イエスは御国の福音を宣べ伝えて歩かれた。（マタイ四・二三、ルカ八・一マタイ九・三五）更に研修さるべき大切なことは神の国である。（マタイ六・三三）それは教育や経歴や結婚よりも更に重要なこである。キリストの使信は神の国であった。（マタイ三・二）バプテスマのヨハネは、神の国の近いことを宣べ伝えた。（マタイ三・二）福音伝道者たちは神の国の働き人である。（Iテサロニケ四・一一）弟子達は神の国が近付いたことを宣べ伝えるように任命されていた。（マタイ・一〇・六）

山上の説教は神の国の憲法である。

主の祈り　の重要な点は「御国を来らせ給え！」である。イエスの譬話は神の国の神秘を内容としてかたられている。（マタイ一三・一一）この譬話は神の国を説明している。御復活の後も、主イエスは尚神の国を中心に語られた。（使徒一・三）神の国の宣言はわれわれの主の再臨前には絶対に必要なことであった。サマリヤにおける伝道者ピリポの主題は神の国であった。（使徒八・一二）パウロのエペソにおける説教の主題は神の国であった。（使徒一九・八）使徒言行録の最後の句は『神の国を宣べ伝えること』で終わっている。黙示録十九章は諸王の王の幻を述べている。

神の国の教えは詩編、ダニエル書、イザヤ書その他の旧約の中に見出される（永遠の国とか、岩なる国とかその他と関係させながら）。新約聖書はこの主題について百四回言及している（七十二回は神の国、三十二回は天国として）。

神の国の教理が正確に認識されるまでは聖書の諸預言は正しい展望において誰にも学びとることば出来ない。と

地区アシュラム案内

▼第45回関東アシュラム
とき　9月17日(月)～19日(水)
ところ　山崎製パン箱根山荘
助言者　島　隆三師

▼第41回関西アシュラム
とき　9月23日(日)～24日(月)
ところ　「母の家」（神戸市灘区）
助言者　後宮　俊夫師
費用　八千円
電話　078-851-4679

▼第42回九州アシュラム
とき　9月16日(土)～17日(月)
ところ　福岡黙想の家

各地区アシュラムの上に祝福を祈りつつ（Y）

〒一八一―〇〇二三 鷹市井口 3―15―8
池の上キリスト教会内
日本クリスチャン・アシュラム連盟
振替口座　東京〇〇一〇〇―一―四五五八
理事長　大石嗣郎